

未来を考える力を **気仙沼復興レポート④****陣山へ復興祈念公園**

気仙沼市は東日本大震災の追悼・祈念施設として、復興祈念公園の整備を計画している。場所は内湾、鹿折地区を展望できる陣山で、10カ所の候補地から絞り込んだ。約2.3haの敷地に祈りの場、駐車場などを整備し、2019年度（平成31年度）の完成を目指している。国の方針に従って他市町が津波浸水地に計画する中、気仙沼市は津波被害を受けなかった高台への整備にこだわったことで、アクセス道の整備などに不安を残している。基本計画の内容を紹介するとともに、復興祈念公園の目的、候補地の選定を整理し、祈り場の役割について考えた。

**■ 震災直後から検討開始**

震災復興祈念公園を被災地へ整備することについては、国が設置した東日本大震災復興構想会議の中で提案された。2011年6月に公表された「復興への提言」の中で掲げた復興7原則の一つに、「失われたおびたしい『いのち』への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する」とまとめたのだ。

国の復興対策本部は翌7月、この復興7原則をもとに「東日本大震災からの復興の基本方針」を決定。「地元発意による鎮魂と復興の象徴となる森や丘や施設の整備を検討する。その際、阪神・淡路大震災の際の取組みも参考とする」と復興施策に盛り込んだ。

「地元発意」を意識し、気仙沼市はすぐに復興大臣へ対して、「鎮魂の森及び国立震災復興祈念公園に関する提言書」を提出。津波で打ち上げられ、大きな注目を集めていた第18共徳丸をモニュメントとして残し、その一帯を復興祈念公園、安波山に鎮魂の森を整備することを提案した。10月に策定した気仙沼市震災復興計画の重点事業にも「鎮魂の森



及び震災復興・防災祈念公園の整備」を取り入れた。

ところが、第18共徳丸は保存に賛否が分かれて解体することになり、震災遺構として気仙沼向洋高校の被災校舎が急浮上するなど状況が変わった。さらに、各県の1カ所だけ整備することになっていた国営の追悼・祈念施設を石巻市(岩手県は陸前高田市)に整備することが2014年10月に決定。これに合わせて、市町村による追悼・祈念施設整備を復興交付金の対象とする方針も示された。

復興交付金を活用するためには、規模、施設内容、公有地(防災集団移転の被災元地)の活用など、適切な計画であることを復興庁が確認することが条件とされた。そのチェックは厳しく、南三陸町では公園の規模を縮小するなどの計画変更を余儀なくされるなどした。

## ■ 候補地 10カ所から絞り込む

第18共徳丸一帯に代わる追悼・祈念公園として、  
として、市が本格的な検討を始めたのは、気仙沼向  
洋高校の震災遺構保存を決定した後の2015年9月  
だった。新たな候補地を探すため、総務部長を座長  
とする庁内検討会を設置して条件を整理し、コンサル  
タント会社(アジア航測気仙沼営業所)が抽出し  
た10カ所の評価を行った＝下表に評価結果詳細＝。

候補地探しの条件は、①津波浸水被害を受けてい  
ない高台等②震災犠牲者の冥福を祈る人々が自由  
に往来できる広さを確保する③海が見えて復旧・復  
興の様子を一望できる④甚大な被害があった地域  
の最寄りなど。津波浸水地に近い高台の多くは住宅  
の再建先となっているため、この条件をもとに探し  
出せたのは、唐桑町の台の下、出山、漁火パーク、  
大島の亀山、鹿折の浦島、内湾、松岩の片浜、階上  
の岩井崎、本吉町の日門漁港、津谷川右岸だった。

復興祈念公園候補地の評価結果

		台の下	出山	漁火パーク	亀山	内湾	浦島	片浜	岩井崎	日門漁港	津谷川右岸
自然特性	標高(50m以上でA評価)	B	B	A	A	A	A	B	B	B	B
	地形(造成不要ならA評価)	B	C	A	C	B	B	A	A	B	C
	眺望(180度以上でA評価)	B	A	B	A	A	A	A	A	A	B
	地質(急傾斜地指定なし等でA評価)	A	B	A	A	B	B	A	A	A	B
	海域安全(特別な保全が不要ならA評価)	A	C	A	A	A	B	C	C	C	B
土地利用特性	現況土地利用(宅地以外ならA評価)	B	A	B	A	A	A	A	B	A	A
	将来の利用計画(計画がなければA評価)	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
	敷地確保の自由度	C	B	C	C	A	C	A	C	A	C
	法規制・文化財	C	C	A	A	C	A	C	C	A	A
	保安林・自然公園・農用地	A	B	B	C	A	A	A	A	C	C
	民家への近接性	B	B	A	A	B	B	B	B	B	A
	地権者数(10人以下ならA評価)	B	A	A	A	B	B	C	B	B	B
	土地所有者(市有地ならA評価)	C	C	A	C	C	C	C	C	C	C
アクセス・インフラ特性	徒歩1km圏内居住者(1000人以上でA)	C	C	B	C	A	C	A	C	A	B
	市内のアクセス時間(30分以内でA)	C	C	C	C	A	B	A	B	B	C
	最寄りの公共交通(500m以内でA)	A	A	B	C	B	B	B	C	C	A
	被災地との近接(甚大な2地区でA)	B	B	C	C	A	B	B	B	B	B
	幹線道路への近接(500m以内でA)	A	A	B	B	B	B	B	A	B	A
	既存のアクセス道(新設・拡幅不要でA)	B	C	A	B	C	C	B	B	B	A
	上下水道整備	B	C	A	A	C	A	B	A	A	A
評価計	A評価	6	6	11	10	10	7	8	7	8	8
	B評価	9	6	6	2	6	9	8	7	8	7
	C評価	5	8	3	8	4	4	4	6	4	5
	A評価の割合	30%	30%	55%	50%	50%	35%	40%	35%	40%	40%
	C評価の割合	25%	40%	15%	40%	20%	20%	20%	30%	20%	25%
	総合評価			○		○		○		○	○

造成や土地取得の容易性、アクセスなどを評価した結果、漁火パーク、内湾、片浜、日門漁港、津谷川右岸が残った。

この5カ所について、気仙沼を象徴する要素、被災状況、市民のアクセス性、眺望について再評価。過去の事例を学び、対外的にも印象が残っているか、地域に古くから親しまれているかについても考慮した結果、内湾の陣山を選定し、震災から5年が経過した2016年3月11日に市民へ向けて公表した。

陣山は市中心部の標高50~57mにあり、第18共徳丸が打ち上げられ、津波火災が発生した鹿折地区、魚町・南町地区を見渡すことができる。市民から親しまれている安波山、魚市場にも近く、土地区画整理によるかさ上げ、大島架橋、三陸道の横断橋などによる復興を実感できる場所であることが評価された。アクセスを考えると、最初から唐桑や本吉は不利だったのだ。

なお、陣山は法規制・文化財、土地所有者、既存のアクセス道、上下水道でC評価を受けた。この場所は館山館跡として埋蔵文化財があるため、必要に応じて確認調査を行わなければならない。

## ■ 事業費 4 億 3100 万円

今月9日の市議会東日本大震災調査特別委員会には、復興祈念公園の基本計画が示された。人が住めなくなった津波浸水地の有効活用を求めている復興庁に対し、気仙沼市は高台を選んだため、調整は難航したという。特にアクセス道の整備が難しく、大型バスのための待避所整備を何とか認めてもらうにとどまった。

復興庁からは浸水地である南気仙沼地区や尾崎地区に整備する防災公園内への整備も助言されたが、気仙沼市が安全な高台にこだわったのは追悼と鎮魂の場が未来にわたって津波被害を

受けないためだ。

基本計画では、整備の目的を「震災による犠牲者に対する追悼と鎮魂の場であると共に、防災への想いを新たに作る場、地域の再興を実感しつつ、未来永劫の安寧を祈る場とする」とした。整備面積は2.3畝で、頂上付近に広さ750㎡の祈りの場を整備し、慰霊碑やモニュメントも設置する。あずまや、トイレ、計50台分の駐車場も整備する。祈りの場までは階段と緩やかな歩道を用意する。

復興祈念公園の概算事業費 (単位:千円)			
区分	事業費	財源	
		復興交付金	市支出金
調査費	70,000	70,000	0
用地費	72,000	25,000	47,000
工事費	289,000	237,000	52,000
合計	431,000	332,000	99,000

事業費は4億3100万円を見込んだ=内訳は上表参照=。慰霊碑やモニュメントの整備は、寄付の募集も検討する。測量、設計、用地買収を進め、来年度から工事に入り、2019年度までの完成を予定。大型バスによる来訪も見込み、鹿折側からアクセス道に3カ所の待避所を整備する。

具体的な設計を進めるため、有識者、地域代表など20人程度による復興祈念公園施設検討委員会を設置し、祈りの場やモニュメントの公募も含めた整備手法、公園の利用と管理、市外来訪者による慰霊





など、園内の詳細について検討することになっている。

市主催追悼式をこの公園で開催する考えはなく、市民がいつでも自由に手を合わせられる場とする。

## ■ 市民とつくり育てる場所に

復興祈念公園の基本設計を見て感じたのは、祈りの場となる平らな土地が思っていた以上に少ないということだ。断面図がないので高低差が分からないが、歩道の周辺にある緑地のデザインによって、慰霊、追悼の場としての雰囲気が変わってくるだろう。植樹活動などにより、市民みんなで作り上げていく場となってほしい。

眺望に関しては安波山や亀山の方には劣るため、この公園の役割は、手を合わせ、花を手向けられる場である。市内では関連死を合わせて1370人が犠牲となり、このうち220人は行方不明のままだ。今までは自宅があった場所に花や線香を捧げる人もいたが、被災宅地の買い取りや復旧・復興工が進み、震災前の風景を忘れそうになっている。市としての追悼施設が整備されることで、長年にわたってたくさんの想いが蓄積される場となる。そのためには、市民に親しまれる場とするための仕掛けも必要だ。音楽会などの追悼イベントが気軽に続けられる

ような空間デザインを期待したい。モニュメントには犠牲者の数を実感できる工夫もほしいところだ。将来へ向けて、津波を知らない世代の防災教育の場ともなるため、学校教育で必ず一度は訪れるように、広島のように、子どもたちも参加できる仕組みも必要になる。節目の年に施設などを整備できる余裕スペースも考えなければならない。

**気仙沼復興レポートは気仙沼市議・今川悟ホームページで公開中。** <http://imakawa.net>

- ①少子化と人口減少②防潮堤問題③復興予算の限界④鉄路復旧とBRT⑤高校再編⑥災害公営住宅⑦仮設住宅⑧財政シミュレーション⑨災害危険区域⑩震災遺構⑪人手不足⑫防災公園⑬震災検証（津波編）⑭三陸道⑮新市立病院⑯造船団地⑰復興事業の地元負担⑱仮設住宅の集約化計画⑲土地区画整理とかさ上げ⑳集会施設の市有化と課題㉑災害公営住宅の管理と家賃㉒試行錯誤の防災集団移転㉓震災5年目の防潮堤㉔住宅再建へ支援と選択㉕要望で振り返る5年㉖神山川堤防と桜並木㉗地盤隆起㉘小・中学校再編㉙避難道㉚仮設住宅の特定延長㉛商業再生と仮設施設㉜地方創生㉝土地区画整理の遅延㉞市営住宅基金と市財政㉟震災遺構の役割㊱防潮堤に学ぶ合意形成㊲復興基金㊳駅前施設棟